

# 六 廿 化



8

俳句雑誌りっか

2013 (平成25年)

cover design Yuna Mizumo

山藤に染まる棚田となり  
吹上げに田搔の人となり  
あさざ咲く水印南を出で  
岩陰に目高ネオンとなり  
牛蛙鳴いて夕風吹きに  
梧桐の一枚一寸借りに  
藤の降る巖に水の分かれ  
下闇を出でて瞼を絞りけり  
蜘蛛の巣の洩日に珠の宿り  
練供養の灰残りみて臭ひ  
みたらしの緑に指をみそぎ

桜山二句

万緑や燈籠は苔結びけり  
一本の蜘蛛の糸虫あへぎけり  
人のみず毛虫は糸を手繰りけり  
不如帰明けの伽藍に名告りけり  
爪先を走れる蟻の暮れにけり  
梅雨茸に水音甘く過ぎにけり  
白南風の猫はおつばいなめにけり  
水音と金魚ますます太りけり  
虎耳草二枚の舌を伸ばしけり  
錦鯉汀に人を恋ひにけり  
五月雨る対岸遠くなりけり

蜘蛛の糸雨粒数多連ねけり  
美人猫抱籠に妬け起こしけり  
羽抜鳥嘴に和毛のつきにけり  
下闇の幹白々と乾きけり  
ボート待つテントを日ざし洩れにけり  
愛煙家つひに片陰出でにけり  
長靴を脱ぎ捨て植田出でにけり  
栗の花泡の如くに落ちにけり  
五月雨や大きな櫛に寄りにけり  
梅雨の蝶ぶつかり合うて去りにけり  
オリーブの花散らかつてをりにけり

あぢさゐに星ぼつぼつと晴れにけり  
クツキーの屑もて蟻を誘ひけり  
蝙蝠かわほりへ爪音の犬走りけり  
蓮の葉にまろびて水の煮えにけり  
髪染める猫額庵も黴びにけり  
長靴を干せる銀河を見上げけり  
岩牡蠣を墨壺に暑気籠りけり  
天の川白鷺が鳴き渡りけり  
実梅から吹き来る風となりにけり  
七夕の笹舟を碑に供へけり  
土用餅たづさへ姉を訪ひにけり

いなみ野病院

# 淋しさの先を見ている桐の花

貝森

光洋

さびしさのさをみているきりのはな かいもりこうよう

現代仮名遣い

人生は使い切れざる風車

漢字では大の一文宇平泳ぎ

泣きそうな貌して崩れ雲の峰

豪快に大鍋据えて露を煮る

淋しさにまだ先があるのが意外。淋しさの極みという。淋しさに限界があるからだ。観念が強いが、読者も覗いてみたくなるはず。その欲望を抑えがたい気持ち伝わってくる。淋しさの源はどこから来るのかはさておき、その前に淋しさの向こう側の実を掴んではいけない。桐の花は仰がねば見えぬよう咲く。人は天を仰ぐとき無防備。大地を踏んでいることをふと忘れる。同時に芯を崩しやすい。だが、ここまでは選者の先走り。淋しさの先に、淋しさを解消してくれるものがあるというのかも。希望の光であることを。

# 死は不意に包みのままの柏餅

## 池田喜代持

しはふいにつつみのままのかしわもち いけだきよじ

たけのこの大地割る音聞きもらす

牡丹や盲導犬の耳を立て

活断層の地軸に触れず牡丹咲く

マネキンの八頭身の更衣

不意に訪れる死は悲痛。その悲しみの極みを「包みのままの柏餅」で表現。柏餅を家族に食べさせようと買ってきた。死ぬなんて考えてもみなかった。死の直前まで皆が美味しいと喜んでくれる顔を見ようと心躍らせていた。家族が喜ぶはずの柏餅が逆に哀しみを倍加させる象徴になった。柏餅には喜びと悲しみの両面が潜んでいた。今は哀しみの方の柏餅。この作品は「なでしこの湯」一泊句会で約一時間に一人三十句を詠んだ。沢山詠むのに考えて作るゆとりなどなかったはず。そのことが無意識層にあった滓（おり）を刺激。哀しみの忘れ物が急浮上してきたのだ。「包みのままの」に慟哭がある。

雪 卿 集

燕の巢

笹村政子

雨粒の匂ふ夕べや薔薇の門  
全容の意外に小さきしぶき滝  
片脚を水にすべらせ牛蛙  
泥受けの箱ずらしあり燕の巢  
夏つばめ田水に影をこぼさざる

若 楓

永田万年青

白濁の落水弾く春の川  
春先に外湯の脚のしろかりき  
葉の色に濃淡のあり新樹光  
境内の四方に眩しき若楓  
白牡丹雨に打たれてやりにけり



せつ じゅ しゅう  
雪 樹 集

分 解

田 尻 勝 子

しやくとりの地面に降りる早さかな  
五月闇御堂におはす如来かな  
誕生と死と分解と春の森  
柿若葉井戸より酌みし目無海老  
おぼろ月に見張られてゐて眠る

城 の 池

筒井八重子

水音に金魚びつくりして寄りぬ  
金盞花周りの花を引き締めぬ  
青葉道老鶯の声響かせて  
ぱりぱりと日傘にあたる雨の音  
濃きうすきみどりあふれし城の池

# 蛍雪譚



六甲

二十五年八月号選後に

淋しさの先を見ている桐の花 貝森光洋

淋しさの極みといいそこが終着駅かと思つたら、ただ先があるという。強い主観の作品だが、選者も覗いてみたい。その欲望を抑えがたい気持ちしが伝わってくる。淋しさの源はどこから来るのかはさておき、その前に淋しさの向こう側の実を見ない方がいい。花は仰がねば見えぬように咲く。人は天を仰ぐとき無防備。大地を踏んでいることをふと忘れる。同時に芯がぶれやすい。だが、ここまでは選者の先走り。淋しさの先に、淋しさを解消してくれる、好転のきざし（希望の光）があるというのかも。

※人は見えないものを見たがり知りたがる。知るための情報は耳鼻舌目触の五感（五官）で受け取るという。だが、もう一つ心で見える六番目の感（勘）や心眼も持っている。肉体的五官で見えない物を心で見て取れる。ふつふつと涌く得体の知れない淋しさは桐の花の色。

人生は使い切れざる風車

今月の光洋作品は哲学的である。哲学はもともとギリシャ語のフィロソフィー（愛智の意）を西周が「哲学」と訳し定着した言葉。「切れざる」とは難制御、意のままにならぬ、沢山ありすぎなど。人生まさに制御が難しく、意のままにならぬ。風車をうまく使いこ

なすことが出来ない」と歎いているのではない。風車にそのことを託しているでもない。が風車に「使い切れない」難問をあてがっているのかも。風車は自ら回ることはせず風任せ。風が強く吹けば強く、弱ければ弱く回り、吹かなければ止まりの受動的。しかし別の見方をすれば、どんな風にも自在に対応のできる柔軟さを持っている達人ともいえる。また、風車を「かざぐるま」と呼ぶか「ふうしゃ」と読むかで違ってくるが、掲句の場合は季語であるから「かざぐるま」。俳句に人生訓を持ち込むのは賛成でないが、すっと胸に入ってくる作品。(以下略)

# 六花集

鐘楼に鐘の届きて百千鳥  
シヤボン玉追ふは弟吹くは姉  
たんぼぼの絮みつければすぐ飛ばす  
湖を背に大仏の散るを見届ける  
剪るくれしぼたんの散るを見届ぬ  
抽斗に折目正して紙風船  
雨もよし晴れて尚よし庭牡丹  
ひとりのお餉老鶯の風部屋中に  
ジヤム煮詰む八十八夜の窓開けて  
頼る日や疎む日のあり新茶くむて

平居 滯子

大内 幸子

中天に風と遊べる鯉のぼり  
大手振り一人の散歩若葉風  
山の香をもらひて飲むや山清水  
鉄線花空の青さを見まつ咲く  
山若葉風の意のまつまつ右左

小寺 ふく子